

# 「走る」という言葉からの連想

岩上 節子

保育をしていると、「子どもって、歩けないので

はないかしら」と思うことがあります。構造的に向いていないというか、適していないというか、いわゆる頭でっかちでバランスが悪いみたい。本人は歩くつもりで、とりあえず一歩踏み出してみているのに、どうも体が不安定で、いつの間にかもう一歩でている様子。一歩一歩、一生懸命バランスをとりながら、しかも、けなげに前に進もうとすると、大人の言うところの「走る」という状態になってしまわないで済むのでしょうか。子どもにとっては、「走る」があたり前で、「歩く」は努力なのだと思います。

す。

でも大人は逆。「歩く」があたり前で、「走る」は努力、もしくは非常事態。例えば、健康のためのジョギング、通勤時のかけこみ乗車や席とり合戦、にわか雨等々。その「走り」に共感できるものときかないものがありますが、一日を振り返った時に、「あれ、今日、一回も走っていない。」と思う日は、元気が足りない気がして、寂しいように思います。とはいえ、もしも、人間が皆「走って」生活していたら、危ないやら落ち着かないやらで、さぞかし生きづらいただろうと思うので、やはり、日常生活では



「歩く」方がより人間らしいということになるのでしょう。だから、転がるように歩いている、というか走っている子どもの姿がどんなにかわいくても、人間社会で暮らしていく以上、「歩く」能力を獲得することは、子どもにとって、必要不可欠なことだと再認識するのです。

ところで、私が教師として、子どもの生活にかかわるにあたって大事にしていることを、「走る」という言葉をキーワードにして捉えなおしてみると、二つの側面から考えられます。

### (1) 走ることによる「走る」の意識化

#### △事例①▽四歳児

運動会を経験してから、時々思い出したようにリレーを楽しむ子ども達。三学期になって、他の遊びをしている子ども達からも「がんばれー」などと声援がとぶようになりました。とてもいい雰囲気です。担任としてもうれしく思っています。ともすれば、

けんかやいざこざに発展しがちな子どものあり余るパワーが、楽しい形で燃焼されて、その子なりの充実感や達成感を味わってほしいと願います。

#### △事例②▽四歳児

遊びのなかで、突如始まる鬼ごっこ。二、三人でするほのぼのとしたものから、先生も混じってのスリリングなものまで、遊び方はいろいろですが、何もかも忘れて走りまわっているうちに気持ち解放されて心の中がすっきりしてしまいます。友達や先生とのふれあいを素朴に楽しめるといふ点からも、うれしい遊びのひとつです。

この二つの例では、子ども達は、今、自分は「走っている」ということを自覚しています。つまり、日常生活場面で走りがちな子ども達が、自ら「走りたい」「走ろう」「今、自分は走っている」と意識することによって、「走る」を子どものコントロール可能なものに変化させていると捉えられるのです。

〔2〕走らないことによる「歩く」の意識化

現在私の勤めている幼稚園は、三学年六クラスが一列に並んでいるという園舎の構造のため、廊下は五十メートル走ができるのではないかと思う程まっすぐに長くのびています。大人である私ですら、走らないで過ごすには、相当の意志の力と精神的かつ時間的ゆとりを必要とします。それでも、限られた空間であることに変わりはないので、折につけ廊下を歩くように子ども達に伝えることをころがけています。「どうぞ走って下さい」と誘いかけてくる廊下という場所で、自然にしていれば走ってしまう子ども達が、どんな風ががんばっているかというところ……。

〈事例〉

とにかく一生懸命歩こうとするあまり足元ばかり見つめて、いつの間にか手が汽車のように動いている子どもがいるかと思うと、その子どもの横を考えなしに走っていく子が、また別の子に「廊下は走っ

ちゃいけないんだよ」と怒られていたり、頭がいいのか運動神経がいいのかよくわかりませんが、誰に言うともなく、「走ってないもん」と叫びながら、笑いながら、廊下をスキップしていく子どももいます。かなりの長い距離をスキップで行き来する姿などは、あきれけるのを乗り越して、ほほえましくさえ思えてしまいます。特に、最初はいまぐすキップにならなくて、ギャロップのような感じだったのが、気が付いたら上手になっている様は、ちょっと感動的だったりします。

この例では、必ずしもすべてが子どもの中から生まれてきたものではありませんが、「廊下を走ると危ないから歩いた方がいいと思う」という教師の働きかけを、子どもが自分なりに受け止めて、「あつ、今自分は歩いていないんだ」ということに気付き、それぞれが、それぞれに、今できることを試しながら、「歩く」と「走る」の違いを意識し、その間をさまよひ、自分の意志で自分を操ろうとする試みと

いえるのではないでしょうか。

\*

[1]の側面から考えたことにしろ、[2]の側面から考えたことにしろ、大人から見れば、他愛のないことにすぎません。でも、大人にとってあたり前になっている身体の動きを子どもが獲得した瞬間の感動は、とても大きいと思うのです。今回は「走る」という言葉からの連想でつらつらと書いてみました

## 走運動のキック力について

松尾 彰文

走運動は地面を強く蹴ることにより発現する移動運動である。図1に疾走時に身体に作用する力を示した。身体は足が地面をキックする力の反作用とし

が、「握る」手に自由自在に力を入れられるようになった瞬間や自分の声が「歌」になった瞬間の、子どもの驚いた様な、うれしい様な表情を見て、大人にとってのあたり前があたり前になるまでの道のりを想い、自分も子どもも「今の自分」を大切に、素直に、生きていきたいと思うのです。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

て地面からキックした力と同じ大きさの地面反力の作用を受け、前方へ移動できる。さらに常に重力と空気抵抗の作用を受けている。地面反力を定量的に